

C-47 人体の動に対する被服の基本のゆとりと形態を材料別の着用実験によりこれを求める (第6報) 福山市立女短大
増田茅子 ○波多野正邦 三好百々江 安原由紀子 川上順子

目的 第1～2報の条件で製作した4種のベシック形ドレスの着用でどの様な変形ひずみを生じたかを第4報で報告した。さらに被服管理上必要なクリーニング処理をし、その結果生じた生地の変化から基本のゆとりの資料を求めようとする。

方法 素材生地の基礎的実験はJIS法により品質試験を実施した。本研究は実生活に近づけた着用実験を行ったので、洗たくも現在市場で実用化している代表的商業クリーニング工程を採用した。すなわち素材特性からドライクリーニング(溶剤:バルクレン,パークレン,石油系)、ランドリー(普通法,強洗たく法)で比較し、ルーチンの仕上後各ベシック形ドレスについて各部位の収縮率を主とした物性変化、風合変化を求め、再着用により衣服圧、主観調査等を第3報に準じて測定し、解析した。

結果 材料別による主な結果は次の通りである。

1. 綿織物の収縮率は非常に大であり、衣服圧でも部位によってその影響がみられた。
 2. 毛織物のドライクリーニングによる収縮率は4種の内では最も小であった。
 3. 合成皮革のよこ方向の収縮は大であり、主観的不適合の訴えも綿に次いで多かった。
 4. 人工皮革のたて方向はドライクリーニングで収縮するが、その収縮率は小であった。
- 着用実験結果を衛生学的、材料学的に考察して基本のゆとりを求めてきたが、洗たくによる収縮や変形は材料別に特徴があり、適正な洗たく法を選ぶことも大切であるが、これらの結果は被服設計へのゆとりの寸法または形態への資料として充分考慮し、定量化してゆく必要がある。